

Essay

Sapiarc.com

2014年7月15日(2014-2)

所澤仁君を悼む

2014年7月11日(金)午後1時過ぎ、私のスマホに電話がかかった。それは、所澤仁君が創設したアジア科学教育経済発展機構 (Asia SEED) の女性からで、所澤仁君が、今日午前11時過ぎに虎の門病院分院 (東急田園都市線梶が谷駅付近) で死去したことを伝えるものだった。私は、思わず「本当ですか?!」と驚きの声を上げた。

所澤君は、昨年5月末に、白血病を発症していることがわかり、それ以来、上記病院の血液内科で治療を受けていた。この病気はがんの一種で、かつては不治とされていたが、今では治療可能になっている。しかし、完治するまでには、2年はかかると、所澤君は医師から言われていた。治療は辛いものだったようだ。抗がん剤を投与すると、がん細胞を退治することはできるが、正常な白血球の数を減らすというマイナスの効果がある。また、いろいろな予想外の症状も起きる。所澤君の場合は、点滴だけで栄養を取り、食事をしない期間があったので、口内にカビが生えて、そのせいか声が変わってしまった時期があった。そういうとき、電話で聞こえる彼の声は、これが本当に所澤君の声なのか?と思うようなときすらあった。

一定期間抗がん剤の投与をした後、正常な白血球の数が増えると、暫く自宅に戻って、ほぼ普通の生活をする。暫くすると、また入院して、抗がん剤の投与を受ける。この過程を繰り返して、段々ががん細胞を減らし行き、最後にがん幹細胞を退治する。そこまで行けば完治したことになる。

昨年の暮れごろには、彼の体調はかなり良さそうで、この調子で行けば、きっと完治するだろうという明るい気持ちに、私もなったし、彼自身もそう思っていただろうと思う。ところが、そうは行かなかった。彼と私が最後に電話で話したのは、6月18日のことだ。それから未だひと月も経っていない。その日には、Asia SEEDの理事会・総会が開催され、私も理事として出席していた。その最中に、私のスマホに所澤君から電話がかかってきたのだ。理事長も他の理事も所澤君がよく知っている人たちばかりだが、何故か私に電話がかかってきた。私は会議室の外に出て、彼と暫く話をし、Asia SEEDの過去1年間の業績は良かったこと、今期の業務計画もしっかり立てられていることを伝えた。

所澤君と私は、58年に及ぶ長い付き合いだった。とくに、東大理学部化学科の同級生として、水島三一郎先生の研究室で一緒に卒業研究をして以来、特別に親しい関係になった。彼と私には、性格的にはほとんど共通点がないと言ってよい。それが却って、私たち2人の関係を良いものにしたのかもしれない。彼は、いろいろなアイデアを出すのが得意で、抜群と言っても良い行動力・実行力を持ち、人付き合いが良く、不思議なぐらい人脈づくりが上手だった。それだけに、行き過ぎたこともしてしまうことがなかったわけではないが、それを修正するのも早かった。それに反して、私は外回りのことは得意とはいえ、とくに対人関係でうまく立ち回することは苦手な方だ。

所澤君について語る場合、彼が三菱油化株式会社（現在は三菱化成株式会社と合併して三菱化学株式会社）の課長だったときに起こった「事件」に触れないわけには行かない。この「事件」を知るには、高杉良著「懲戒解雇」（講談社文庫）を読むのが一番良い。この本では、会社名はトーヨー化成、主人公の名前は森雄造で（東大工学部出身、大学ではラグビー部で活躍）、舞台設定は実際と幾らか違っているが、書かれている内容は、現実に所澤君を巡って起きたことであることは、所澤君自身が認めていた。新装版の巻末には、評論家の佐高信氏の解説があり、その中では、「事件」が起きた会社は三菱油化であり、森雄造のモデルは所澤仁であることが実名で書かれている。

だらしないトップ（会長、社長）、反目する副社長2人、次期またはその次の社長の座を目指してあくどい手を平気で使う常務、保身のため口を閉ざす他の取締役や部長たち、その常務のやり方に反対して懲戒解雇されそうになる森、森を助けようとして懸命に努力する同期入社の人課長、森を支援する課長以下の社員ら（多くの女子社員が森を陰で支援している）の人間模様が活写されている。読んでみると、「すまじきものは宮仕」という諺が自然と浮かんでくる。しかし、森が意を決して、地位保全仮処分の申請書を東京地裁に提出するに及んで、状況は一変する。財閥系名門会社のエリート課長が、こういう訴えを正式に起こしたのは前代未聞のことで、マスコミ各社は一斉に飛びついて、大きな記事にした。会長、社長らは執拗な取材活動の対象となった。

結果的には、森の懲戒解雇はなくなるが、森はある研究所に出向し、常務の社長への昇進は消える。この本が最初に出版されたのは、バブル期よりかなり前の1985年だが、それから24年も経った2009年に新装版がまた出版された（現在はKindle版になっている）。バブル期を境として、日本の企業には大きな変化があったように思われがちだが、実際に企業内で本格的な改革が起きたと思うのは楽天的に過ぎ、昔と似たようなことが起きているので、この本が読まれているのではなかろうか。

実際には、所澤君は、このとき、当時の通産省の外郭団体であった日本エネルギー経済研究所に出向し、そこで日本のエネルギー問題を研究した。彼が考えたのは、南方の国々でキャッサバ芋を栽培して、それを発酵させてアルコールを作ることで、これに似たことは現在世界各国で行われている。所澤君は、当時マスコミから「イモ博士」という綽名を付けられていた。

その後、所澤君は一時別の研究所に在籍したが、キャッサバ芋などを通じて関係が深まった、日本とインドネシアの政官界を巻き込んで、「日本インドネシア科学技術フォーラム」（略称JIF）を立ち上げ、自分はその事務局長に就任した。この組織はいろいろな活動をしたが、中心はインドネシアの若者が日本の大学や大学院に留学するのを支援することで、これは極めてうまく行き、留学から帰国した人たちの中には、現在インドネシア政府の要職についている人たちが多数出ている。この功績によって、所澤君はインドネシア政府から勲章を授与された。また、一時大統領を務めたバハルディン・ユスフ・ハビビ氏とは昵懇の仲になった。ハビビ氏は元々技術者で、ドイツのメッサーシュミット社の副社長に若くしてなった経歴の持ち主である。

この事業を始めたとき、所澤君は「東南アジアからの留学生は、母国に帰ると、将来それぞれの国の指導者層になる。アジアの国々の指導者が、日本の文化を理解し、日本人と日本語で話せることは、日本にとって大変な国益になる」と語っていたそうなので、彼の意図したことが実現していることになる。これは、所澤君の先見の明を示していると言える。

このような活動は、所澤君の存在を大きなものにして行き、その結果、1999年に、JIFをインドネシア以外の国々（とくにタイとマレーシア）にも拡大する形で、特定非営利法人「アジア科学教育経済発展機構」（略称Asia SEED）が設立され、所澤君はその初代理事長に就任した。この組織は、東南アジア諸国と日本との間に実施されるさまざまな事業の面倒をきめ細かくみることが仕事で、そのためのknow-howを

溜め込んでいることが強みである。所澤君は、理事長を自らの意向で多分7年前に退任した。これは彼の立派なところで、いつまでもトップの座に居続けている人が多い今の世の中では、貴重な存在であった。

所澤君は、1年に1回程度、面倒な話が終わったときなどに、気楽に話す相手として私に声をかけてきた。彼は酒にめっぽう強く、いくら飲んでも酔いつぶれることはなかったが、私は余り飲めない。だから、彼は食事を楽しみながら、酒は自分が好きだけ飲んでた。今の世の中についての見方を話題にすることが多かったが、それでどうということのない気楽な会話なので、彼の気を休めることになったのだろう。こういう機会の最後になったのは、昨年初頭で、場所は門前仲町にある一風変わったフランス料理店だった。彼は、こういう店を実によく知っていた。こういう機会が今後なくなることは、私にとって淋しい限りである。

最後に、所澤君が三菱油化に入るようになったことに、私がほんの少し貢献したことを書いておこう。当時東大理学化学科では、1社に1名だけ就職するという内規があり、三菱油化に就職を希望したのは、Y.S.君であった。所澤君は、後になってから油化に行きたいという気持ちが強くなったのだが、それだと2名になってしまう、内規を守ることができない。そこで、彼が私に言ったのか、私が彼に言ったのか憶えていないが、私が教室主任教授（現在の専攻長または学科長に相当）だった島村修教授（専門は有機反応化学）のところに行って、2名にするよう頼むことになった。島村教授は、長い歴史のある化学科始まって以来の秀才だと言われた方で、学部学生たちの憧れの的だったが、近寄りやすい感じのする人で、学部学生が簡単に話せる相手ではなかった。私は恐るおそる島村教授室に行き、所澤君も油化に行かせて欲しいと頼んだ、実際のやり取りまでは憶えていない。その結果、案外すんなりと2人にしても良いということになったのだ。当時は石油化学産業の勃興期であり、会社の方は何人でも採用する気でいたと思う。

学部の卒業式があった日ではなかったかと思うが、私たちは、珍しく銀座のバーに行き、少し飲んだことがあった。私がバーに入ったのは、そのときが初めてだった。多分所澤君が前に来たことのあるところだったのだろう。アメリカの会社で相当な地位にありそうな人が先客として居た。若い者が3、4人来たので、何者なのか興味を持ったらしく、向こうから話しかけてきた。少なくとも私はそれまで英会話というものをしていなかったのだが、何とかたどたどしく応対した。私は petrochemistry（石油化学）という単語をかるうじて知っていたので、私たちは今度東大を卒業して、所澤君は a petrochemical company に就職することになっており、私自身は大学院に進むのだというようなことを言った。そのアメリカ人は予想以上に喜んでくれて、私たちの分まで支払ってくれたような記憶がある。所澤君が逝ってしまって、遠い昔のことを思い出すことが多くなっている。

なお、所澤君の三菱油化(化学)からの出向という形は、彼が本来の定年になるまで続いたようだ。非常に特別なことだっただろう。正確なことは知らないが、それに伴う給与面での措置もあったようだ。したがって、彼はずっと自分は三菱の人間という意識を持っていたと思う。JIF や Asia SEED での活動は、三菱という大きな組織の中にいるよりも、彼の性格に向いていたかもしれないが、もっと大きな組織を動かすこともやらせてみたかったと、私は思っている。所澤君の御霊よ、安らかに眠れ。（おわり）